様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００１８１

研究課題名（和文）古代性の指標としての様式-東地中海世界における古代末期壁画様式研究-

研究課題名（英文）Styles as indices of the Classicalness – Studies of Late Antique Wall Paintings in the Eastern Mediterranean World-

研究代表者
宮坂　朋（Miyasaka, Tomo）

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：８０２７１７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：レバノンをはじめとする地中海東部沿岸のローマ時代後期の遺跡は、十分調査されていない。本研究はヘレニズム様式からビザンティン様式への移行がどのようになされたのかを課題とした。古代末期の地下墓壁画の絵画様式について取り上げ、ヘレニズム美術様式が衰退したという観点からのみ捉えるのは一面に過ぎないという結論である。衰退というより東方伝統文化の復活という積極的意味があったと捉えるべきである。すなわちヘレニズムは唯一の古代的規範ではなく、在地の伝統と並ぶ二元論の一要素に過ぎない。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地中海東部沿岸のローマ時代後期の遺跡は、度重なる内戦で十分調査されていない。本研究は古代からビザンティンへの移行がどのようになされたのかを課題とした。古代末期の地下墓壁画の絵画様式について取り上げ、ヘレニズム美術様式が衰退したという観点からのみ捉えるのは一面に過ぎないという結論である。衰退というより東方伝統文化の復活という積極的意味があったと捉えるべきである。すなわちヘレニズムは唯一の古代的規範ではなく、在地の伝統と並ぶ二元論の一要素に過ぎないという点を明らかにしたことは意義深い。

研究成果の概要（英文）：As far as the late roman sites in the Eastern Mediterranean coast are concerned, they are not fully studied. This research aimed to unveil the transition from the Hellenistic style to the Byzantine style. Considering the Underground tomb wall paintings, it is not the case to consider them only from the stand point of decline. It is also the revival of the traditional cultures of the Orient. That is to say, the Hellenism is not the only standard for the ancient Mediterranean World, but one of the elements of dualism with local traditional styles.

研究分野：美術史

キーワード：ローマ　古代末期　壁画　地下墓　レバノン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

東地中海地域の古代末期絵画様式の展開については、基準となる研究がない。とりわけ壁画については、十分な調査がなされていない。本研究代表者は、2001 年からのレバノン調査でティール壁画全体像の把握を試み、1994 年以前から継続するカタコンベ壁画研究を行なった。この実績を元に２世紀から５世紀のレバノンのローマ壁画の様式の発展についての実地調査を含む包括的な研究を行う。加えて、東地中海全域の壁画文献資料調査と西方での発展の比較研究により、古代ローマ世界の絵画様式の発展を明らかにする。

２．研究の目的

当初の目的は古代末期の東地中海世界の壁画の様式の発展を明らかにすることであり、レバノンのローマ時代の地下墓壁画に関して文献調査と実地調査を行いどのように西洋古代様式が変化していったのかを明らかにすることであった。ヘレニズム美術様式が基本になると考え、そこからの「かけはなれ」を正しく評価し、より厳密な様式分析に関する研究方法を提示することも課題とした。

３．研究の方法

（１）　レバノン渡航が治安悪化のため不可能となったため、予定を変更し、過去の実地調査により撮影したデジタル画像・スライド、文献による画像を利用した作品分析と
３D データ化したヘレニズムの彫刻とササン朝の彫刻との比較
（２）　発掘報告書、雑誌論文、専門書･学術論文などの文献による、様式研究

４．研究成果

（１）東地中海沿岸の古代末期の絵画様式については、セレウコス朝やプトレマイオス朝のヘレニズム化美術様式が衰退したという観点からのみ捉えるのは間違っている。ヘレニズム様式の衰退だけでなく、図像や様式等の様々なローマ化、パルティアやササン朝ペルシア美術、さらにはアケメネス朝ペルシアにも遡るイラン的要素、王朝期からあるエジプトにおける伝統文化の復活の影響があることを認めなくてはならない。すなわちヘレニズムは唯一の古代的規範ではなく、在地の複雑な伝統と合い並ぶ二元論の一要素、あるいはほんの新参者の様式に過ぎなかった。しかし様々な形で永続的な影響を持ち続けた。

（２）2 世紀以降の東地中海沿岸に現在まで残る壁画の作例の大半は地下墓壁画だが、ポンペイ第 2～第 4 様式からの自由な選択の傾向を示す（カンデラブルム・スタイルなど）とともに、同じ葬祭ジャンルの石棺浮彫（花綱石棺）や霊廟内装のモザイクの形式、様式と図像（散らかった床、ディオニュソス図像、組紐文などの装飾パタン）を引き継いでいる。建築再現への興味の減少、神話主題の減少、天井画の重要性の増大、モザイクとオプス・セクティレの影響は、古代末期のローマ世界全体を通じて見られる共通の現象である。

（３）ヘレニズム化に対抗する、北アフリカおよびエジプトの「抽象主義」様式の分析を行い、東方的伝統に基づく在地の職人による様式であるとともに、ギリシア的教養の背景を持たないテトラルキアの皇帝によって採用されたことにより帝国全体に波及したことを明らかにした。これは、1～3 世紀のミイラ肖像画や板絵の「プレ・コプト」様式、皇帝肖像や凱旋門浮彫などの公共浮彫などの彫刻における、線と面でとらえるテトラルキア様式、2 世紀から 4 世紀の北アフリカの床モザイクのフローラル・スタイルに基づく在地的発展による装飾的で平面的な様式とその広範囲な伝播により構成されていると考えられる。ここには、パルミラ帝国などペルシア文化の影響を強く受けた勢力の支配下におけるイラン的な影響も見受けられるので複雑である。

（４）記念碑的浮彫彫刻（壁画に影響を与えた）に関しては、ナクシェ・ルスタムのシャープ―ル一世の摩崖浮彫など、ササン朝の彫刻作品は、ローマの戦勝記念碑のクレメンティア（慈悲）図像を採用するなど、ローマ美術の影響を受けている。また、このようなペルシアの作品が、テッサロニケのガレリウス帝凱旋門の浮彫の構図など、ローマ美術にも影響を与えていることが分かった。さらに、彫刻作品が壁画に与えた影響を明らかにするため、メタシェイプによる 3D

データ作成を行い、特に抽象的な作品（テトラルキア様式の彫刻）とヘレニズム様式の作品（イタリア、アルビのメドゥーサの墓、メドゥーサ頭部の石膏レプリカ）の石材に対する取り組みの違いの比較を行うことにより、より客観的な記述と比較の方法についての試行を行った。テトラルキア時代の彫刻作品の平面性は、石材ブロックの各面から平行に彫り進める方法に起因するものである。

（５）地中海世界を超えたローマ世界におけるヘレニズム絵画伝統とはかけ離れた様式の導入、例えば、モザイク様式、石棺様式、公共浮彫の様式の壁画への導入などは、衰退ではなく、積極的な意味を持っていたことが明らかになったといえる。すなわち、古くから地中海東岸においては、エジプトやメソポタミア、あるいはイラン系の文化が主流であって、再現的なヘレニズム様式はむしろ傍流であり、古代末期はむしろ東方の美術様式を正統として積極的に選択した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 宮坂朋	４．巻 第9号
２．論文標題 「商業神ヘラクレス」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『弘前大学人文社会科学部人文社会論叢』	６．最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮坂朋	４．巻 7
２．論文標題 「アッティス―ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画と古代末期のシンクレティズム―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 弘前大学人文社会科学部人文社会科学論叢	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮坂朋	４．巻 34
２．論文標題 ヴィア･ラティーナ･カタコンベ壁画の様式	５．発行年 2018年
３．雑誌名 弘前大学人文学部人文社会論叢	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮坂朋	４．巻 25
２．論文標題 古代末期におけるモニュメンタルな残虐場面	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第２５回ヘレニズム～イスラーム考古学研究	６．最初と最後の頁 49-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮坂朋	４．巻 1
２．論文標題 古代ローマの怖い絵―初期キリスト教美術の残虐場面―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 弘前大学人文社会科学部　国際公開講座　２０１８　資料集	６．最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮坂朋	４．巻 第35号
２．論文標題 カタコンベの異教神　：古代末期の宗教観	５．発行年 2019年
３．雑誌名 弘前大学人文学部人文社会論叢	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 宮坂朋
２．発表標題 レバノンのローマ壁画
３．学会等名 第26回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮坂朋
２．発表標題 古代末期壁画における公的要素：アンノーナとローマ公共浮彫
３．学会等名 第25回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮坂朋
２．発表標題 古代ローマの怖い絵―初期キリスト教美術の残虐場面―
３．学会等名 弘前大学人文社会科学部　国際公開講座　２０１８
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

展示企画 弘前大学資料館第21回企画展 2018年10月19日（金）～12月25日（火） 弘前大学資料館「古代地中海の死後の世界　壁画と副葬品に見る死生観」 講演 2018年10月20日「キリスト教以前のお墓」『弘前大学資料館第２１回企画展ギャラリートーク』 2018年11月3日「古代ローマの怖い絵―初期キリスト教美術の残虐場面―」『弘前大学人文社会科学部　国際公開講座　２０１８』(弘前大学人文社会科学部多目的ホール) 2018年12月25日「キリスト教のお墓」『弘前大学資料館第２１回企画展ギャラリートーク』

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関